

Title	昭和拾年度秋期佐渡ヶ島見學旅行記
Sub Title	
Author	會田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.14, No.4 (1936. 3) ,p.157(695)- 167(705)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360300-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

昭和拾年度秋期佐渡ヶ島

見學旅行記

昭和十年拾月拾六日(水)午後拾時上野驛集合、十時三十五分發の上越線にて佐渡ヶ島見學旅行の途につく。一行は伊木先生を始め、學生が七名——石川博道・永野浩三・堀野滿治・齋藤威・松尾善郎・高島正純・會田倉吉である。

翌拾七日(木)午前七時三十五分新潟驛着、直ちにバスで、信濃川に架る長い萬代橋を渡つて、驛前から埠頭へ向ふ。薄暗い船室に荷物をかたづけ、甲板へ出て見た時、始めて我にかへつて、祕かに、こんな船で良いのかなと思ふ。船の名は第八佐渡丸、三百噸があると云ふことだ。幸にして海は極く平穩であつた。乗船客には水兵が多勢居た。話の様子では休暇を得て歸郷する人々のやうである。約三時間を航行して小佐渡の東端姫崎の燈臺を過ぎる頃、大佐渡はなほ行手に遠く横はり、金北山らしきものがかすかに望まれる。これは二つの離れた島ではないかと思はれた程で、佐渡ヶ島の案外大きいのに今更ながらつくづく感じ入る。それから約三十分、兩津港に着く。棧橋には旅館の客引を始めとし、大勢が船を迎へ、岸には十數臺のタクシーが居並ぶと云ふ有様である。本年の國勢調査の結果では、相川町に僅か數人の優を許した

に過ぎない迄に、近時益々著しい發展を示して居る兩津町である。

約東通りの出迎へを受け、直ぐに旅館青木屋に落着いて晝食をとる。その頃から空模様急に悪くなり、沛然と降り來つた雨の強さにしばし出足を止められてしまつた。漸く兩脚衰へたので、貸切自動車で出發、加茂湖に沿うて縣道を走ること十數分、湖を後に海上にある牛尾神社へ着いた頃には幸に日が照り、此處から道を左へとつて、尙工事中の所もあると云ふ約半里の新道を、三十分餘り歩いて長安寺(眞言宗)へ向ふ。寺へ着く直前の數丁が未だ工事中で、雨上りの殊にヒドイ道であつた。

寺の前には「國寶阿彌陀如來古鐘朝鮮鐘陽雲山長安寺」と彫つた石が向つて左方に立ち、稍右寄りには簡素な鳥居があり、中央奥に藁葺の古びた仁王門が建つて居る。如何にも荒廢したと云ふ感じで、邊りは何となくうす暗い。門には仁王尊もなく、之を道入ると正面が國寶奉安所である。本尊阿彌陀佛は修理の爲め眞野村の國分寺へ行つて居るとの事で、龍宮の鐘といふ朝鮮鐘だけが空虚な須彌壇の前に安置してある。充分に青味を帯びた此の銅鐘は高さ二尺七寸三分と云ひ、所謂朝鮮鐘の様式を見せて形態秀美、上部と口邊とには美しい唐草文様を有する帶を繞らし、上部四面には上帶に接して唐草文様の縁をもつ乳廓がある。殊に龍頭は立派なもので、天正年間上杉氏が持ち來つたものといふことだが、後、二宮村の眞光寺に移り、明治初年に至つて再び戻つたのだと云ふ。磨損は少いが、鐘銘は別がない。鐘の兩側に立つ木像金剛力士は元來仁王門にあるべきもので、傳説には運慶が順德天皇を慕ひまゐらせて當國に渡り、此の地——河崎村久知河に良材を得て造つた

とも傳へられるが、古いと云ふ點では兎も角、作は寧ろ附近に住んで居た素人の上手が彫つたものではないかと云ふ推定説もある。この三間四方の御堂の向つて右、前記鳥居の突き當りに二基の燈籠を控へた白山神社がある。鎮守の神祠が同じ境内に現存することが特に一行の注意をひいた。これから左へ、いくつかの墓石の間を通つて本堂へ出る。正面に佐渡出身の故萩野由之博士筆「長安寺」の額が掲げてある。此處で見せて頂いた長安寺文書は、

一、寛元貳年八月日 長安寺草創記

一、文永八年三月日 御使右兵衛尉藤原某禁制

一、文永十年二月三日 沙彌寂信奉書

一、建治元年八月八日 僧長圓長安寺院主職讓狀

一、元亨三年十二月日 沙彌寶明寄進狀

一、正中貳年八月五日 沙彌圓光寄進狀

一、康永貳年卯月三日 増教印寄進狀

一、觀應貳年八月十三日 左衛門尉貞泰定書

一、觀應三年二月日 左兵衛尉源頼秀定書

一、觀應參年閏二月日 左衛門尉貞泰定書

一、應安五年十月日 加賀次郎源直泰安塔狀

一、應永十三年十一月日 源高泰定書

一、同日 左彌源祐定書

一、寶徳四年八月吉日 某充狀

一、文明十一年閏九月八日 明藏阿闍梨寄進狀

其外、江戸時代の文書數通で、佐渡に於ける比較的古い時代の文書の一番まとまつたものであらう。雨のため豫定が遅れて居たの

で早々にして辭したが、住職の方は無花果の大きな包の御土産をもつて、道の悪い所を暫らく送つて来てくださった。寺も昔はあの山のある邊にあつて豪勢なものであつたが、今の様に斯うして低い谷間に移つたのは承久年間のことである、と指さしながら説明してくださる松の茂つた山の邊を見遣る。日が強く照つて居た。當寺の開基は天長八年で、古くは天長寺と稱し、八宗兼學の巨刹であり、且つ地頭本間氏の祈願所として佛具・什寶或は福田も少くなかつたのだが、天正の兵亂に上杉氏の軍兵亂入して後、非常に衰微し、遂に新穂村大野の清水寺(眞言宗)の末寺となつて今日に至つたものださうで、話に依れば當寺の數多の脇坊が次第に廢されては農家となり、今日此の村を成して居るのだと云ふことである。曾て掲げられて居た順徳天皇御宸筆の「陽雲山」の扁額も、天正の頃上杉勢のために越後魚沼郡上田雲洞庵に移されてしまつたと云はれる。多大な好意を感謝して一同は新穂村大野の根本寺に向つた。因に、清水寺の住職で在京中の宮崎榮雅氏には、長安寺其他の事である、配慮を煩したのである。

根本寺(日蓮宗)は日蓮流謫蟄居の跡で、寺前向つて左側の遺跡戒壇塚こそ、文永八年九月十四日彼が當國流謫と決して、此處の地頭本間重遠のため鎌倉から護送して來られ放置されたと云ふ草庵——三昧堂の跡で、同年十一月から翌年四月まで多くの苦難を忍びつゝ、此處に諸宗の僧徒と法問を試みたり、一代の大著開目抄を著したと傳へられて居る。其の後、天文年間に京都妙覺寺の目成に依り祖師堂創建せられ、次いで、天正年間上杉氏當國を領するに及び、直江山城守の外護を得て正教寺と爲り、妙覺寺に

屬してゐるが、元和元年獨立して塚原山根本寺と稱した。この邊一帶は古く村民の墓地であつた爲め、今日もなほ塚原と呼ばれ、山號を塚原山といふのもその爲めである。仁王門を入つて數間、二天門があり、右側には太鼓堂、左側には鐘堂、更に數間正面の布金壇上に祖師堂がある。祖師堂は檀越味方但馬の寄進になるものと云はれる。味方但馬は名を家重と云つて播州三方の人であるが、元和年間相川鑛山の山師として割間歩（坑名）の採掘に成功し、その豪奢振りには「但馬さんの世盛り」と稱された程で、墓は當時の境内にある。祖師堂の向つて右に宏壯な本堂、左に千佛堂・寶藏がある。

寶藏の嚴重な扉を開くと、正面に日蓮が日朗に與へたと云ふ畫像が掲げられ、それには自筆の題目が記され、更に細字法華經八卷の中一巻が貼られて居るが、年號が詳かでない。残りの七巻は別に保存せられてゐる。日蓮畫像の左右に文永十一年三月十三日付の日朗畫像、曆應三年庚辰三月二十八日付の日像畫像、日得畫像・再蓮日榮筆題目・中興信重筆題目・日像の畫ける紙本着色日朗像・大覺の畫ける日像像・加藤清正筆と傳ふる紙本法華經法塔には清正自身の左手であるといふ大きな黒い手印が捺されてある。また硝子戸棚の上には、鬼子母神像・再蓮から宗祖へ贈つたと傳ふる石磬・日蓮が三昧堂に居る頃用ひた洗面盥と傳ふる土器、順德天皇御所持と傳ふる妙見大士像、傳運慶作仁王・傳日蓮筆細字法華經（前述の畫像にはられたものの殘部七卷）・傳日蓮使用の珠數・瓦硯（布目瓦の立派なもので、天平前後のものではないかと云はれて居る）・八ツ組の無紋朱椀、傳菅原道眞筆金泥法華經

第八卷、傳日蓮作の大國像・銅柄香爐等々が順次に並べられ、中にも注意されるのは土佐光信筆菅公衣冠の像であらう。これは紙本であるが、美しく着色されたもので、曾て谷文晁が將軍の命と稱して複寫した事があり、文晁は其の粉本を所持して居たと云ふ。寶藏を見て後、太鼓堂に上る。越前へ漂着した水牛の皮で張つたものと傳へられる太鼓が樓上にある。流石に古來佐渡名物の一ともなつて居るもので、如何にも大きく、指先でポンと叩くとブルンと鈍い低い音を出した。一面は破れて居る。邊には參詣者等の落書が一杯であつた。



次に中興を過ぎ、御井戸堂―日蓮が地頭中興信重の招に應じて信者の爲めに曼茶羅を書くに用ひたと云ふ井戸の址―を見ながら黒木御所址に至る。順德天皇御遷幸の後、承久年間國分寺から此處に移らせ給ひ御座なされた行宮の址と稱せら

れた行宮の址と稱せら

れる所である。佐渡に於ける行宮の事に就いては、文明年間眞輪寺の僧法慶の書いた眞野山皇陵記には眞野村大字眞野の堂所にあつたと傳へ、佐渡風土記・佐渡名所集等々では八幡村下八幡宇尻屋に求めて居るが、共に疑はしい事は既に田中從太郎氏の佐渡志にも「其の説疑はしき事少からねば省きつ」と云ひ、佐渡國誌では岩本擴氏がそれを考證して居る。又、此の金澤村大字泉に行宮のあつたと云ふ説は、觀世元清の「金鳥集」にも、瀧澤馬琴の「烹雜の記」にも見える通りであるが、今日此の地は宮内省の手で保存され、柵を繞らし泉石樹木を按排して清淨の一區をなして居る。柵内には先づ和泉黒木御所跡由來書の立札があり、萩野博士書の黒木御所蹟の石碑や、東郷元帥書の皇太子殿下御誕生記念碑等が立てられて居る。黒木と云ふのは元來皮附の儘削らぬ丸木の義であつて、行在所は黒木で造られて居たが故に黒木御所と稱されたもので、云はゞ假の御所の意である。此の御所の四方にはそれぞれ東に觀音、西に彌陀、南に薬師、北に天神と四尊が安置されて居たと云はれるが、其の中の正觀音が附近の法教山本光寺（本門法華宗）に國寶として保存せられて居る。

本光寺の國寶觀音像は俗に泉の觀音と稱せられ、當寺の縁起に依ると聖徳太子の御作と傳へ、順徳天皇が承久三年七月佐渡へ御遷幸の御隨身の四個靈像の一で、天皇御在世中に黒木御所の東方の淨地に觀音堂を御建立あらせられ、中興の地頭本間氏の息子平吾をして觀音別當とし、大和房と稱せしめられたが、この大和房が文永九年春日蓮上人に歸依して日性と號し、堂を法華堂と改めて之を守護して來たと云ふ。又、同寺所藏の傳宸筆短冊、弓、

長刀、香合も仁治三年九月天皇崩御の時、大和房に賜はれたものと傳へられ、何れも本堂の左にある堂内の土藏造りの中に此等は保存せられてゐる。そして右の順徳天皇御守本尊と傳ふる木像の觀世音菩薩像は、冠から蓮華臺まで御丈三尺三寸三分の立像で、作は藤原末期のものとして居る。鼠のために多少傷められた個所があるのは勿體なくもあり、また惜しくもある。この本尊は、これも當時の儘といふ極く簡素な厨子の中に安置され、更にそれが壯麗な外厨子内に納められて居る。之は天保七年相川の有志達に依つて寄贈されたものと云ふ。なほ前記黒木御所の四方に安置されたといふ四像の中、他の三躰はそれ〴〵彌陀は泉福寺の遺址彌陀堂に、薬師は荒貴神社に、天神は北野神社の神體として祀られたと云ふ。

附近の禪刹正法寺は、世阿彌元清が足利將軍義教のため七十二歳にして當國に流された時籠つて居た所で、所謂「金鳥集」は此處で作られ、又その間謠曲佐渡七番を作り、其の中の「壇風」は則ち阿新丸の仇討を書いたものである。同寺には慶長二十年の刻銘のある雲板があり、境内には元清の腰掛石と稱する遺跡もあると云ふが、時間が無かつたので寺前を通り過ぎたゞけで、暮れかゝる道を妙照寺へと急いだ。

妙照寺（日蓮宗）に着いた頃は既に暗く、境内の鬱蒼たる樹木は殊に夜陰の感を深くせしめた。門を入つて數十階の石段を降りると、正面本堂に燈火が見え、讀經の聲が聞えて來た。此處一ノ谷（今は市野澤）は、日蓮が文永九年四月から同十一年三月まで、守護代本間重連の家臣近藤伊豫守清久の監視のもとに坐居して居

た所である。その草庵の跡は今の御影堂の地といふことであるが、彼は此處で十年四月には觀心本尊抄を書初め、七月には本宗の至寶と稱せられる大曼荼羅を書いて、始めて日蓮宗の教義を確立したと云はれる。而して清久は其の子信重と共に日蓮に歸依し、後年この地に一字を建立して名付けて妙照寺と稱した。妙宣寺、根本寺と共に日蓮宗佐渡三本山の一である。當寺は住職不在で、院代が事を扱ひ、寶物拜觀のことなどにも面倒があつたのみならず、既に時刻も遅いので、早々にして退去し、一路相川町へ向つた。旅館高田屋に着いたのは六時半であつた。

二

拾八日(金)。暴風と豪雨とで一夜が明けたが、朝になつてもその名残りの風強く、雨も降つて居た。それでも八時には宿を出て鑛山見學に向ふ。佐渡の鑛山と云へば勿論相川鑛山で代表されるので、開坑は普通慶長六年と云ふ。併し其の以前既に發見せられて居た事は諸書に明證あり、同年に至つて新たに良鑛脈を發見して俄かに盛況を呈したが爲めに、之を始めとするやうになつたものであらうとは佐渡國誌にも記す通りである。幕府は同年之を收公し、翌々八年から大久保石見守長安をして經營せしめ、慶長十八年長安失脚以後は代官を置いて一島の民政と金坑とを治せしめた。斯くて益々隆盛を極め、元和から寛永、元祿にかけては坑數三百、これに伴ふ相川町の繁榮も亦頂點に達し、慶長十八年の人口實に十萬以上と云ふから、殆んど今日の佐渡全體の人口に及ぶ程であつたわけである。鑛山は維新後官營に歸し、明治二十二年

御料局に轉屬し、二十九年十一月三菱合資會社に拂下げられて、今三菱鑛業の經營する所である。豫め占部教授の御紹介もあつたので、懇切に案内して頂くことが出來た。

先づ最も古く最も有名な道遊山へ向ふ。トロッコの通ずる道を暫らく進み、高任の堅坑に至れば愈々鑛山の氣分が濃くなる。その頃には空はカラリと晴れて、所謂道遊の割戸はまともに日をうけて居た。其處の事務所で、鑛山の規模に就いて一應の説明を聞き、鑛石の標本や遺物などを見る。徳川初期に用ひられたと云ふ木製の朽ちた採掘用具——槌や物指等もあつた。それから案内に従つて道遊坑に入り、特に徳川時代採掘の跡を見る。一人が蹲んでやつと入れるだけの穴が、坑道内の横壁に處々あいて居て、鈍い電燈の光の陰に一層無氣味な位であつた。坑の内外に徳川時代の採鑛の殘骸が澤山にある。現今では此等を更に精鍊するのが多いといふことである。次には、採掘された鑛石から如何にして金が抽出されるかの過程を、選鑛場・搗鑛場・精製場・青化場・浮游場・選鑛場等々、順を追ふて實際に目撃し、それ／＼主任の丁寧なる説明を聞いたわけである。採鑛法としては手掘と機械掘とが併用せられ、搬出した鑛石は選鑛場に送つて上中下の三鑛と捨石とに分け、その中の下鑛だけは更に搗鑛場で搗碎し、汞化法でアマलगムと淘汰物とを採取する。その上、このアマलगムは精製場の分頭爐で蒸溜して水銀を分け、残つた荒地金は溶解して金銀地金とするし、一方砂鑛は青化場へ、泥鑛は浮游選鑛場へとまわつて精製せられ、他の上中鑛及び淘汰物は香川縣の直島精鍊所へ送られると云ふ事である。略々四時間近くかゝつて見學を済ま

せ、漸く工場を出ようとした頃再び豪雨に見舞はれ、此の日の行程は中止のやむなきに至るのではないかと心配さへ起り、一先づ宿に戻つて晝食をとることにした。

小止みを待つて、遂に出發はしたが、時間の豫定も相違したので、佐渡奉行所址など見る暇もなく、二見村の龍吟寺へ急ぐ。而も海岸の道は波が荒くて危険だと云ふので、澤根を経て二見へ廻つた。此處は、昔から避難港として知られて居るだけに、波は極く静かである。

中宮山龍吟寺(眞言宗)には國寶觀音像があり、その高さ一尺一寸七分の金銅立像である。思つたよりも質素な寺に一人の若い和尚さんが居て、暫らく御經をあげて後、拜觀を許された。緣起に依れば、この本尊大聖觀世音菩薩は作者未詳ではあるが、承久三年七月九日順德天皇御遷幸の際、御所持あらせられたものと云はれ、始めは此の二見浦の双巖上に安置せられて居たが、後、香蓮坊と呼ぶ小庵に納め、祕像として保護して來た。爾來その小庵は觀音院龍寺と改め稱するに及んだとのことである。尤も現今の地は元祿年間移建したものと云ふ。尊像の面相は微笑を含み、寶髻は大きく束ね、右手を胸側に上げて掌を外にし、拇指をかゞめて接觸せしめ、左手を伸下して掌を仰げ、掌中には持物をたてた柄がある。蓮座に仰俯の蓮辨を組立てた様など、如何にも古風が見え、説明では白鳳末期のものとして云ふ事であつた。寫生的技法に依つて表現せられたる眼や口邊の充分な愛嬌、又、腰邊にまとはれた裳の襷や衣褶などに見る寫生的作法からして、鎌倉時代に古様に倣つて作られたものと一般には見られて居るのである。そし

て此の新舊様式の混合が、この像の最も特色とするところであらう。背後の二重擧身光も亦銅板の打出しからなり、像と同時の作とせられ、瓔珞・天衣は別に打出して作つたものを取りつけてある。

此處から澤根へ引きかへして河原田を過ぎ、新町から左折して眞野村妙宣寺へ向ふ。その途中、田間の小高い丘陵は、雜田本間氏累代の居城であつた雜田の城址で、日野資朝の「秋たけし檀の梢吹く風に、雜田の里は紅葉しにけり」の歌がらとつて、俗に檀風城と呼ばれ、卿の幽閉の舊蹟として有名である。僅か十三歳の其の子阿新丸(後の邦光)が、單身父の仇を報いた物語も此の城内での事である。こゝから妙宣寺に行く路傍には阿新の隠れ松と稱する太木がある。雜田が國府の所在地であつた事は和名抄の記載に依つて知られ、佐渡志では此の壇風城をそれに當てゝ居る程で、此の邊が如何に樞要の地として、往昔佐渡の中心をなして居たかゞ窺はれるであらう。

阿佛坊妙宣寺(日蓮宗)は見るからに壯大な寺である。遠藤爲盛、後の日得上人の開基に成るもので、爲盛は元來順德天皇に供奉した侍臣で、遠藤系圖の示す所では盛遠則ち高尾の文覺の弟に當る。天皇の崩御後、入道して服喪すること三十餘年間、時の人呼んで阿佛坊と稱した。そして妻子日尼と共に、塚原に難澁する日蓮を厚く庇護し、深く之に歸依し、その子盛綱も亦出家して阿佛日滿と稱し、父子相計つて邸宅を寺とした。則ち妙宣寺と呼び、此の二人が當山の開基である。従つて始めには新穗村にあつたが、嘉曆年間雜田城主本間泰昌が居城の傍に之を移し、更に天正

年間に至つて其の子孫高滋と云ふ者、田園を寄附して今の地に移したと云ふ。シト〜と降る雨の中を庫裏へ廻つて刺を通じたが、或る事情の爲め寶物の拜觀を許されなかつた事は、一同の期待が大きかつただけに、如何にも残念であつた。止むなく、境内の五重塔及び日野資朝の墓等を見るだけであつた。本島唯一と云ふ此の五重塔は、結構頗る壯麗で、そぼふる雨中に高くそびえて居た。資朝の墓は境内樓門の傍にある。周圍に丸石を積んだ一坪餘りの小高い所に柵を設け、内の古杉の残株の下に、高さ約三尺方五寸許りの五輪形の墓標がある。文字は見えない。改めて云ふまでもなく、資朝は後醍醐天皇を奉じて藤原俊基等と計り、北條氏討滅の軍を起さんとして成らず、正中二年十二月八日遂に流されて、當地の壇風城内に幽閉せられたのである。併し、謫居八年の間、専心佛法を修めて他念の無かつたにも拘らず、正慶元年五月二十九日北條高時の命ずるまゝに、本間のために斬首された事は其の子阿新丸の報復の話と共に、太平記或は増鏡や大日本史等に依つても既に何人も知る通りである。而して従者は卿の遺骸を荼毘して残灰を埋め、上に二株の杉を植えて目標にしておいたと云ふ。恐らく現在の位置であらう。明治になつてから卿は眞野宮に配祀せられ、又從二位を追贈せられた。

佐渡最古の巨刹たる國分寺(眞言宗)は又妙宣寺の附近である。國分寺と云ふものは聖武天皇天平十三年三月の詔勅に依つて國毎に設けられた事になつてゐるが、諸國の地誌、寺誌等に見る設立年代は必ずしも一定せず、現に當寺は天平九年の勅願に依つて建立せられたとも傳へられてゐる。佐渡志にも之を記し、而も九年

叢報

の詔勅と云ふに對しては特に註をほどこして、「今案ニ續日本紀九年ニ是詔見エズ是詔ハ天平十九年十一月ナルヲ詞中ニ天平十三年二月十四日ノ文見エタレバ國分寺及國分尼寺ハ續日本紀濫觴抄日本紀略扶桑略記東大寺金銅碑文杯ミナ天平十三年二月ノ創設トス然レドモカクテハ又續紀十三年正月ニ國分寺ノ名見エタルヲ怪シトス然レドモ猶創設ハ元享釋書ニ據リテ九年トヤスベキ思フニ九年ニ内命アリテ十三年ニ寺名ヲ定メラレケルニヤ」と説明し、當國の國分寺も亦然うである筈だと云つて居る。或は、續日本紀天平九年三月の條の記事「詔曰。每國令造。釋迦佛像一軀。挾持菩薩二軀。兼寫大般若經一部。」をもつて國分寺の濫觴と見、之の説が生じたものと思へぬこともない。要するに國分寺設立の準備は古くから行はれたもので、その由來する所遠く、天平十三年には始めて之を天下に布くの運びに至つたものと一般に解せられて居る以上、此の傳へも無碍には却け難いものがあらう。その後約三十年、神護景雲二年三月北陸道使豐野真人出雲が、從來越後で支辨して來た當國の造國分寺料を、佐渡國內から徵收するやうにせられたいと願つた續紀の記事からすれば、少くとも其の時には當寺の竣工してゐた事を知り得るのだが、創立年代について確たる記録が存するわけではない。尙、當寺は正安、享祿の兩度の火災に七重塔及び諸堂悉く焼失し、現在國寶藥師如來を安置してある三間四方の東に面する質素な藁葺の琉璃堂背後に當つて、當時の伽藍の礎石を残してゐる。昭和二年十月新町の山本半藏氏等の發見に依るものと云はれ、四年十二月には文部省史蹟保存地に指定せられ、竹柵をめぐらして、それ〜説明がしてある。中でも塔

の中心礎石は、佐渡志にも「七重塔の礎は今も残り奇古の物也」と註記せられてゐて、早くから知られて居たもののやうである。今、琉璃堂の前にある手洗盤は其の中心礎石を割りとつたものと云ふ。

現在の堂宇は徳川氏の初期に建立せられたものと云はれ、なほ儼然として島内第一の大寺たる面影を持して居る。寶物の第一は云ふまでもなく本尊藥師如來で、その他の寶物舊記などは、前述の通り災害の爲め、殆んど焼失してしまつたのである。只、順徳帝御所持香爐と稱するものや、二三の瓦が一室に陳列してあつた。

本尊の國寶藥師如來は高さ四尺五寸七分の木彫坐像で、行基菩薩の作と傳へる藤原前期のものである。丁度、本堂の廂の間に於いて修理中であつた爲め、平素では拜することの出来ない程詳しく見せて貰ふことが出来た。又、昨日訪ねた長安寺から、修繕の爲め當寺に來て居る阿彌陀如來坐像は、之より稍小さく又高さ約三尺、藤原時代の特色を供へたものである。蓮瓣は四枚重ねの珍らしいもので、光背が又美しい。なほ此處には、畑野村長谷寺の木造十一面觀世音立像三軀も來て居た。長谷寺(眞言宗)では之を祕佛として觀音堂に安置し、絶對に公開しないと云はれて居るので、今度の豫定にも省いてをいたのだが、それを此處で、偶然拜見する事の出來たのは幸運と云はねばならぬ。此等は三尺五六寸の立像で、何れも樞或は桂の一木に彫刻せられ、眼などは墨書に過ぎない程に簡素な作法を見せて居る。一見印度様式の加味が想像されるが、寺傳には弘法大師作と云ひ、製作年代は貞觀末期と見られて居る。

阿佛坊の近くに又、世尊寺(本門法華宗)がある。遠藤盛國、後の日増上人が、文永九年の頃日蓮に隨身渡海せる日興の教化をうけて弟子となり、文永十年の春新堂を造立して、師の日興を仰ぎ之を開基としたと云ふ。此處には日蓮の消息文その他の古文書があるので、阿佛坊で寶物を見られなかつた代りにもと思つて立寄つたが、突然の事として之も見ることが出来なかつた。

新町では、郷土史家山本半藏氏の宅で、先を急ぐ爲め遺憾ではあつたが極く簡単に、所藏物の幾つかを見せて頂く。相川鑛山に關する繪卷物一卷、久遠宮台覽の野口松人形、數種の流人關係文書の斷片を集めたもの一卷、——例へば、慶長五年水帳の奥書・寛永十五年身賣手形(佐渡奉行大林與兵衛印鑑あり)・寶永二年往來手形・奉行川路三左衛門聖謨の皆濟目錄裏書(三左と署名して聖謨の黒印あり)等々——で、此の他特に見るべきものは天平瓦の數個、國分寺にあつたものより寧ろ良い。巴瓦の紋様は蓮華紋に屬し、蓮葩の形は劍頭・柳葉・蘭花狀等がある。瓣數は概ね六で、菊花狀のものには七或は八のものもある。華瓦には波狀・網代形・擬草文等があつた。これから縣社眞野宮に赴きて眞野御陵に詣つ。

眞野宮は、もと國分寺の末寺眞輪寺で、陵を守り四時の祭儀を掌つて居たが、維新の際廢止せられ、改めて明治元年十二月、同寺に奉祀して居た池清範の奉刻せる順徳天皇御木像を御神體とし、且つ寺内の小社に祀つてあつた菅公像をも配祀して創立せられたものである。御神體は明治七年攝津水無瀬宮に奉遷せられ、今日は明治天皇御下賜の御劍が祀られてゐること、九年五

序には日野資朝も合祀せられた事は先述の通りである。

順徳天皇の御陵は、明治二十二年それを山城國愛宕郡大原に御治定になつたので、當所は正しくは順徳天皇御火葬塚と呼ばれるべきであるが、猶ほ一般には御陵と呼ばれてゐる。此の御火葬塚は申すまでもなく、順徳天皇の御遺骸を火葬せられた址であるが、百練抄寛元元年條に「四月廿八日申戌佐渡院御骨康光法師奉縣首渡御大原云々。五月十三日佐渡院御骨今日奉納大原墓所」と記されて居る通り、天皇の御遺骨は京都に奉遷せられたのであるから、此處は御火葬塚としての御取扱である。現状は、石垣をめぐらした城内中央に更に柵門を設け、その中央堆く樹木が立つて居る。往年陵土いたく荒廢し、國分寺の僧賢教等上書歎願して、佐渡奉行會根吉正を通じて幕府の助力を得、延寶七年六月工事竣成したのが現今の境域であつて、陵前の二基の燈籠も、當時會根奉行の獻納したものであると云ふ。曾つては蒲生君平が詣で、吉田松陰・宮部鼎藏が頼いたのも此處である。夕暗せまる陵前に颯々たる木枯の音をきゝながら、懐古の情ひたゞと胸に湧くを覺える。

小高い此の陵附近から眞野の入江を臨んだ黄昏の景色は、最も印象深い風光の一であつた。参拜の後、一路自動車を小木町へと急がせる。豊田の海で、月光に輝く基盤波を見てから三十分、小比叡も經て、小木の灯がホノ見え始めた頃は六時半になつて居た。

三

拾九日(土)。豫定は小木から寺泊へ渡る筈であつたが、天候の都合で、も一度兩津へ戻り、そこから新潟へ渡ることにした。午

前八時、一行は旅館樓座屋を發つて、城山・經島・箭島等を望みながら海潮寺に向ひ、小木の三岬の四所御所樓と歌にもある御所樓を見る。本堂前の石壘を挟んで左右兩株が對植され、花崗石の柵で圍まれたる前に、承久帝御手植と説明がある。句櫻の一種で、八重と一重とが混生すると云はれ、天然記念物に指定せられて居るのだが、花期でないのが残念であつた。兩津發の船が午後一時なので、附近をゆつくり見學すると云ふわけにもいかなかつた。尤も、小木も和船の頃はいざ知らず、汽船時代の今日では兩津におかれて寧ろ衰退の途上にあると云はれ、相川金山の全盛期に出船千艘入船千艘と謳はれた昔の佛を偲ぶ事は難しい。

小比叡山蓮華臺寺(眞言宗)は小木町の北三軒にあり、享保十年賢徹の草すると云ふ由來記には、「夫小比え山者我弘法大師平城大同二年丁亥首胤同三戊子年五月佛閣成也(中略)殆以出形似江外比え山號小比え山標平八葉之峯宗名蓮花峯也」とあると縁起に見える。昨日は時間の都合で寄ることが出来なかつたので、今朝改めて訪れたのである。縣道に面して立つ石門を入つてから坂道を二、三丁下つて、漸く右に仁王門を見る。くゞれば正面に小さな村社小比叡神社があり、右の建物が金堂である。更に左へ階段を降ると本堂があり、續いて庫裏がある。つまり此の縣道からの道は裏道の觀があるが、昔から之が本道とされて居るとの話である。刺を通ずると、残念にも住職は留守で、昨日なら一日待つて居たとのことであつた。寺寶の見學はできなかつたが、それでも奥院(弘法堂)、金堂(觀音堂)は開けて見せて頂く事が出来た。國寶建造物は佐渡では此の二つに止まるのである。金堂の左を少

し上つて二つの他の御堂を過ぎると、藁葺覆屋の中に、方三間單層屋根入母屋造茅葺の建物があり、之が奥院と稱される弘法堂で、室町時代のもとせられて居る。内部は外観よりも更に簡素で、須彌壇の上部に丹塗りの跡が残り、繪様は大部分繪具が既に剝落し、僅かに形だけが鉛筆で復元してある。厨子の中には樞の木で刻まれた弘法大師の像を置く。其の背面には貞觀十一年の刻銘があると云ふも、これを取り出して見ることは出来なかつた。覆屋も相當時代を経たものと思はれ、

此覆屋寛永十一年甲戌

自正月廿一日始同年

二月十八日造作畢

本願主

住持法印 快慶

施主 小比叡山門徒衆僧

(その他 數名)

と、堂内鴨居の上に誌されてある。快慶は寛永年間の住職で、當寺に據つて辻信俊と云ふ者と謀り、所謂承應の變をおこしたことがあるが、その際の火災で本堂、庫裏、寶藏までも焼失したと傳へられて居る。又、その爲め什寶も殆んど失はれて、寺には多く傳つて居ないと云ふ。金堂は方五間單層入母屋造棧瓦葺、前者と同時代のものとせられて居る。聞けば、明治二十年頃修築されたので、以前は矢張り藁葺であつたと云ふことだ。仁王門を出て歸る途中の左側、丁度金堂の背に當る所に數個の堂が建ち、それらの中に徳川家康、秀忠の廟がある。兩者並んで共通の覆屋に納まり、

他の建物に比べて流石に華麗である。當寺は徳川氏の頃、東照台徳二公の廟所を置き、寺領九十石五斗の御朱印を賜つて、末寺五十に餘り、代々の住職は國分寺と同様に、その營中に將軍に謁することが出来たと云ふ。

昨日の夜通つた同じ道を今日は午前中に通る。運轉手も同行既に三日になるので、すつかり親しくなつて、冗談を交へたりしながら、過ぎ行く附近の説明をしてくれる。俗に云ふ七曲りの險を過ぎて小泊、此の右方の山には祝部陶器及び布目瓦を製造した陶窯遺跡があり、窯跡が現存すると云ふ。西三川の上流笹川に古くから砂金の出たことは有名で、宇治拾遺物語卷四に、能登の者から佐渡國から約八十兩の金を持ち歸つたと云ふのは、此處が其の出處だとせられて居る。豊田の碁盤波を見る邊は日蓮が文永十一年三月赦免歸倉に際し、弟子や檀那に辭別した遺跡と傳へ、思案崎と稱せられて、今御腰掛石と稱するものがある。新町に入らうとする道の左側、眞野の入江の戀ヶ浦は順徳天皇御遷幸の御着船の地とせられて居て、

いざさらば 磯打つ浪に こと問はん

おきのかたには 何事かある

と、御製を刻んだ石碑が石柵の内に立てられ、一本の老松が之を覆ふて居る。云ふまでもなく、承久の變の結果、同じ様に遷されたものである。順徳天皇の御着船の月日は詳かではないが、寺泊御發轅は承久三年九月頃と推定せられて居る。天皇の御遷幸については東鑑にも承久記にも見えてゐる通りである。傳説では、

天皇は一時國分寺を假宮となされて、後、和泉御所の竣成を待つて之に移らせられ、二十二年を経て、仁治三年九月國分寺の末眞輪寺に於いて崩御あらせられたといふことである。天皇の又の御製に、

おもひきや 雲のはてまで 流れきて

眞野の入江に くちはてんとは

と云ふのがある。而して佐渡は諸處に天皇の御遺跡を残して居る。道の右方山上には、天皇が行宮を定められたといふ堂所御所址と稱へる場所もあるが、之は前述の通り信じ難いものであらう。佐渡年代記には承應二年、相川の札の辻を基點として一里塚を築いた事が記されてあると云ふが、今來た道の傍にも、その跡と稱される小高くして樹を植えた所があつた。

新町から國中平野の南部を走る縣道に入る。畑野から新穂へ出て兩津へ達する道である。斯うして通ると、國中平野が如何に立派な、そして當國にとつて如何に大切なものであるかを痛切に感ずる。米産も自給自足どころか、他國へ出してゐるとさへ聞かされた。平野の周圍は山が取りまき、恰も盆地に居るやうな感じで、山の向ふに大洋があるとはとても考へられない。此の平野には太古海水か通じて、海峽をなして居たものと云はれ、國名「サド」の起りも迫門(サト)の轉語から出たとの説が行はれて居る位で、加茂湖などは其の名残りと思はれぬでもない。畑野は島内で最も裕富な所ださうだが、小木などよりは確かに立派に見える。畑野に入る前に順徳天皇第一皇女慶子女王御墓と稱するものが、松を圍んで石垣だけ、左に遠く望まれ、附近の日朗坂は日朗が日蓮の救

免狀を携へ來つた時の舊跡と云ふ。新穂を通つたのは十一時頃、これから兩津までは二日前に通つた路で、此處まで來ると何となく或る懐しみを覺える。やがて再び青木屋の同じ室に寛ろいだ時は全くほつとした。唯、新穂村井内の神宮寺にある銅鐘を見なかつた事は、佐渡にある國寶の中では、今度見落した唯一のものだけに惜しい氣がせぬでもない。

晝食を攝つて、一時發の汽船に乗る。斯くして過ぎた三日の旅は、或る時は風に、或る時は雨に、又或る時は霰にさへ見舞はれて、必ずしも天候には恵まれなかつたけれども、別に行程をひどく災されたと云ふではなく、過ぎ去つてから回顧すれば、寧ろ種々な場合の佐渡を一時に經驗し得た事を喜ぶ位のものである。都合に依つて見學し得ない所も多少はあつたが、假令それらを除いても、各自充分に得る所はあつた。そして島を後にするに當つて、佐渡ヶ島の決して小さくはないことを今更のやうに思ひ浮べるのであつた。又、僅かに覺えた方言を使つて、「もう船も出るハッチヤ(筈である)」などと云つてみたりする。行きと違つて歸りの船は、雨にも降られ相當に揺れもした。途中で行き違つた「おけさ丸」は赤腹を波間に見せたり隠したりして居た。それでも一同恙なく五時新潟港へ着き、市内で晚餐をとつてから、互ひの無事を祝福しつゝ、新潟驛に解散することが出來た。時に午後九時であつた。

終りに臨んで、當旅行のために、數多御便宜を與へて下さつた諸氏、並びに旅行中各所に於いて享けた御厚意に對して、深謝するものである。

(會 田 倉 吉)